

統一



第百二十一號要目

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可 每月一回)
(明治廿八年四月十五日發行 第一號百廿一號 每月一回)

- 日蓮上人の宗義及系統(承前)……本多日生
- ▲清水梁山師の本尊論に就て……相川、白藤、新
- 日什大正師置文諷誦章(承前)……阪本日垣
- ▲各地教信……
- 村上專精師の佛陀論に就て……本多日生
- ▲南無釋迦牟尼佛……
- 寂日房御書……本多日生
- ▲懺悔錄……野茨花生
- 不受不施史料(其四)……梶本日種
- ▲先更會綱領……▲次號の像告……

基礎金領收報告

下野國上都賀郡東大蘆村下澤

一金壹圓也 木村和吉殿

右御寄贈相成正ニ領収候也

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を具とす
一購讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するべし或は爲替振込の節拂渡通知料紙錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五錢活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅八年三月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團

發行所東京市淺草區南松山町四十五番地

團

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
(電話本局二千三百八十二番)

御 附ぞく
籙 小道具
人 形
東 羽子板
武 者 人 形

抑も故五郎殿かくれ給て既に四十九日也無常はつねの習ひなれども此事うち聞人すら猶忍
びがたし況んや母と成り妻となる人をや心の中おしはかれて候ふ人の子には幼きもあり
長きもあり醜きもありかたわなるものあるすら物思になるべかりけるにや男子たる上萬に
たぐひなさけあり故上野殿には壯んなりし時わくれて歎き浅からざりしに此子を懐妊せず
ば火にも入り水にも入らうと思ふ此子既に平安なりしかば誰にあつらへて身をもなくべき
と思ふにこれに心をなくさめて此十四五年はすぎぬいかにとすべき二人の男子にこそ荷わ
しぬと恐もしく思ひ候つるに今年九月五日月を雲にかくされ花を風にふかせて夢か夢な
らざるかあはれ久しき夢かなど歎きあかして四十九日さける花は留まりつぼめる花はちり
ぬ老たる母はのこりて幼子は去ぬ昔より今になさけなきは無常也只かゝる國をいとひすて
故五郎殿の御信用ありし法華經につかせ給ひ常住不壞の靈山淨土へまいらせ給へ父は靈山
に母は娑婆に留れり二人の中間にねはします故五郎殿の心こそ思ひやられて哀にたばへ
候へ

統

日蓮上人の宗義及系統

本多日生講述
古定賢正筆受

各論 第二章 實相論
第一節 實相の釋義

予はこれより實相といふことの釋義を試みんと欲す是妙法五
字の實相論を述べんとする前提なり佛敎の法界觀の中に於て
實相論の如きは尤も發達せるものにして到底他の宗敎には無
き所なり小乘に於ては苦集滅道をと居れども此等は消極的
思想にしてともに論ずるに足らず勿論四諦にも種々ありて三
藏敎の四諦は生滅の四諦なり通敎の四諦は不生滅の四諦なり
別敎の四諦は無量の四諦なり圓敎の四諦は無作の四諦なり圓
敎無作の四諦は三藏と異なりて遙に高等なる思想なりこれを
究竟すれば實相論に入る
實相論は通途宇宙論としか見へざれども、こは單に宇宙論に
あらず人身觀を裏面に説くものなり佛敎には到る處實相の語
あれども詮する處眞の實相觀といふものは爾前にも現はれず
迹門にも顯はれず即ち本門に到つて顯れたるなり迹門の實相

は恰も月の体顯れたるも雲のおひかりたるが如く本門の實
相は雲はれて亦月の委明かとなりたるが如し
天台は實相論を如何に説くかといふに即ち一念三千觀を立て
以て實相論を説く不二門に今經の意に準ずるに未だ曾て
暫くも三千の妙法を離すといふ天台の一念三千論は佛敎の理
の歴史上特殊の發達を爲せるものにして實相論として誠に珍
重すべきものなり天台の一念三千觀を立るや三法妙を以て立
つ三法妙とは佛法妙心法妙衆生法妙是なりこの三法妙は互ひ
に不離不即の關係を有し佛法妙を擧ぐれば二法これに隨ひ心
法妙を擧ぐれば餘の二法これに隨ふ而も衆生法は廣し佛法妙は
高し獨り心法妙のみ低くして近し故に心法妙をとつて三千法
界を立て、一念に接す故に一念三千といふもの成立せしなり
若これに反して三千を衆生法の中に於て立てば一聲三千論
ともなり一香三千論ともなり一色三千論ともなり併ながら
今は敢て廣きを捨て、狭きをとりたり
玄義の衆生法は太だ廣し佛法妙は高し初學に於て難しといひ
しもの行者自身の領解の分際を計つて心法妙の低きをとりし
なり不二門にも丈をさつて尺をとり尺をさつて寸をとり灸に
穴を得るが如しといへり此等は三千を觀するに心法妙の低き
狭きを擇びたることをいふなり
一念三千の實相觀は一方より見れば宇宙觀となり亦一方より
見れば人身觀となる實相と人身と契合する處ありて始めて實

相の眞價値顯はれるなり天台は其修行方が知慧行なるが故に専ら理觀の一念三千を立つ日蓮上人は然らず其修行の方法が信念口唱なれば事の一念三千を立つ天台は陰妄の一念を立てしかども日蓮上人は信念の一念を立て給ひたり天台の三千は理性の三千なれども日蓮上人の三千は功德の三千なり彼は因中の三千をときこれは悟中の三千をとく彼は抽象化の三千をときこれは具体化の三千をとく一念三千論の素地をなせる十如是の中の因、緣、果の中には業感緣起論つゝされ体、の中には賴耶緣起論つゝされ其他の緣起論は皆此十如是の中につゝまる以て如何に一念三千論の廣大なる組織を知るべからずや

第二節 妙法五字の實相說

妙法五字の實相說とは畢竟日蓮上人の實相說をのべんとするに外ならず天台は心法妙をとり陰妄の一念を立てしと雖も日蓮上人は佛法妙に約して三千を説き佛院の智見を尊ぶ佛院の功德佛院の力用は悉く妙法蓮華經の五字に具足す吾等愚凡の輩は此五字を信念口唱すれば直ちに妙法の功德を領納するなり妙法蓮華經は語言陀羅尼の王なり一代經の功德を集めたる處なり法華八卷の功德を結晶したる文字なり三世十方の諸佛の意思の積聚せる處なり日蓮上人は十章抄にいはいく砂をかゞへ大海を見るも尙圓の行なり如何に況んや爾前の經をよみ彌陀等の諸佛の名號をとらふるをや但しこれ等は

自身のなるべし眞實の圓の行に準じて常に口ずさみすべきことは南無妙法蓮華經也心に存すべきことは一念三千の觀法也是は智者の行解也日本國の在家のもの唯一同に南無妙法蓮華經と唱へさすべし

此の御書に依て見れば如何に我日蓮上人が妙法口唱說に力を入れられたるやを見るべし
吾日蓮上人は天台の觀念論は極力排斥せられし處にして其決然として新組織の宗教を興すや實相の智慧門的修行を蹴つてこれを信念門に移し給へり是上人の特殊の見地にして到底他の企圖すべからざるの處たり觀心本尊抄に釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足すといへるもの即ち果滿の實相を五字の題目につゝみたるなり大悲の意思のこもれる五字となりたるなり是上人が宗義の特殊の發展なり

各論 第三章 佛院論

第一節 日蓮上人の佛院論

近頃は佛院論に就て諸家が競ふて意見を公にしつゝあり村上博士佛院論一論の第三篇として佛院論を著したり佛院論に於ける佛院觀は人身より發達して眞理觀に到達したるものと亦眞理より發達して人身觀を成立せしものと二つあり併し何れも一佛多身說に到達して眞の佛院を認識する能はず畢竟壽量品の佛院觀に入らざれば眞の佛院を認識する能はず壽量品の佛院觀は多佛存在說を打破りたるものにして眞に釋迦待論

を遺憾なく道破したるものなり村上氏は天台の佛院論を學んで日蓮上人の佛院觀を破したれども是甚だ誤まれるものにして畢竟日蓮上人の教學を學ばざる故なり予は今日日蓮上人の佛院觀に就て下の條項を追ふて述べる處あらんとす

一日蓮上人の佛院觀上特殊の着眼點

二台當の關係

三本佛に於ける相對的解釋絕對的解釋

四境智の關係に於ける生起の別

五法身為本と應身常住との別

六三身即一に於ける報身正意と應身為正の別

七圓慈の究竟的發揮

八本迹に於ける相對身中心即ち人格の究竟的唱導

九統一的本尊の成立

十積極的統一主義の絶叫即ち折伏的化導の眞價

第一の日蓮上人の佛院觀上特殊の着眼點を述べれば日蓮上人は人格的の佛院の實在を唱導せられたり天台が理的法身佛は其主張たる實相說より續釋し來りて建立せしと雖も佛院の轉相廣くばかりなりて信仰の意識を寫象する能はず故に上人は天台の相々實相論の立脚地より人格的佛院の實在を説き出せしなり彼觀は光明の實在を説きしと雖も是は佛院の眞の立場にあらず廣がれる佛院を建立する時は瓦石も時に佛院となる

ことあり是に佛院觀上注意すべきことならずや我日蓮上人は吾人信念の對象として具體的佛院人格的佛院を説き給ひたり是佛院に於ける佛院觀發展史上特に注意すべきことたらんばあらす

第二の台當の關係に就て述べれば天台は体の佛を何人も説き即ち釋迦を以て本佛と稱するかと見れば亦善徳佛を以て本佛となし而して此本佛の下に迹佛を何人も立てたり即ち体の佛を何人も説き同時に用の佛も何人もなく立てたり少しも其間に統一なし天台は畢竟相對的統一主義なり日蓮上人は三世十方の本佛迹佛を悉く打破つて久遠實成の釋迦牟尼佛を光顯せしなり此久遠實成の釋迦牟尼佛は從來天台等に於て主張せし本佛と稱するもの亦は其迹佛と稱するものを悉く統一したる本佛にして一佛多身說の究竟的解釋絕對的統一主義の佛院觀なり天台は數量を説けども日蓮上人は非數量を説き久遠無始を主張す是天台と異なる所以なり

第三本佛に於ける相對的解釋及び絶待的解釋は上にのべたる如く日蓮上人は本佛に對する絶待的解釋をとり天台は本佛に對して相對的解釋をとりしなり
第四の境智の關係に於ける生起の別を論ずれば境とは實相なり智は實相を智了したる智なり此境智の冥合するを佛院といふ天台は此境が智を發すといふて境を本とす十妙のなかにも第一に境妙を論ずるが如きは即ち境を重視したるなり此境本

論よりして勢ひ佛陀を第二位に置く日蓮上人は然らず智に重きを置き境を重く見ず即ち佛陀を第一位に置き給ふ故に上人の説を以て事本理徳の説とし天台の説を理本事迹の説といふ天台は境より總て生起せりとさき日蓮は智より總て生起せりとさく是境智の關係に於て台當の異なる所なり

第五には法身為本と應身常住との別なるが天台は法身為本論にして毘盧の一本を以て法身の本体としたり本極法身微妙深遠佛若不說彌勒尙闕と説きたるは天台なるが是とりも直さず天台の法身為本論の根據なり天台は佛を以て證体の用となせり即ち体は實相なり用は佛なり故に其佛陀は無常の佛陀なり且くうれが常住に見ゆるは實相の理が常住なるが故なり日蓮上人の應身常住論は即ち人格的佛陀の常住をとくなり應身佛がいつも常住にましますと説き給ひて金色の如來柔耐の御姿其まゝが直ちに常住なりと宜ふ法身為本は理談に入りて論ずるに足らず唯人格常住論は信行に入りて始めて活るものなり

第六三身即一に於ける報身為正と應身為正の別をいはゞ天台は壽量品を解釋して正在報身といひ我實成佛の成佛とは上冥法身下垂應身といひ壽量品の教主は報身如來なりといへり是天台が報身正意なる所以なり日蓮上人は然らず悲應身如來を以て正しく壽量品の佛陀なりとし信行を以て此佛陀の慈悲を受取るものと説かる法華取要抄に五百塵點以來我等衆生は

教主釋尊の愛子なりといひ應身為正の説を主張し釋尊の實在無限、慈悲、智慧を讚歎し給ひたり

第七圓慈の究竟的發揮とは如何この説は慈悲觀の尤も發展したるものにして涅槃經の梵行品に出てたり慈とは如來なりといひ慈とは大乘なりといひ慈とは空なりといひ慈とは僧伽なりといひ萬有も人生も皆悉く慈悲なりといふ而して此の如き圓慈の思想は皆應身為正論に入り來りて始めて其眞價を發揮するものなり

第八本迹に於ける相對身中心即ち人格の究竟的唱導を論せば本佛觀に於て絶對的見解をとるものは漠然と廣がつて居て山川草木一塵一法皆本佛の形相となり信念の中心となること難しかくの如き一大圓佛の思想にして終には法身論に墮落せん日蓮上人の佛陀觀は此漠然たる佛陀を却て相對身を立て、以て絶對身を顯し有限性の佛陀を説いて以て無限性の佛陀を顯す莊嚴佛を立て、宇宙身を顯す是我日蓮上人が佛陀觀の特點にして學者の宜しく思ひをひらひむべき點なりとす

第九統一的本尊の成立をいはゞ佛陀無限の活動が即ち本尊となりたるなり口輪の活動身輪の活動意輪の活動此三輪の活動は相携へて茲に本尊を建立せしなり吾等信念を以て此本尊に對する時直ちに佛陀意輪の慈悲に攝取せらるゝなり茲に於てか吾等は信慈一体の當位に入る統一的本尊は畢竟如來三輪の化益なり

第十は釋迦牟尼佛の活動以外に他の諸佛の活動の餘地なし然るを敢て他の緣なき諸佛を拜するは甚だ誤れり統一の信仰を把持せんと欲せば勢ひ統一の折伏主義をとらざる可らず佛陀の慈悲を感受するものゝ多きだけ尙更積極的統一主義を絶叫せざる可らず釋尊の慈悲に入り釋尊の御姿を拜しますと折伏の行をばけみ一人も多く此尊き佛の道に導けよ

以上は單に日蓮上人の佛陀觀上特殊の着眞點を概論したるにすぎず以下詳細に述ぶる處あらんとす

清水梁山師の本尊論に就て

相 白 不
川 藤 新

(不新)四月八日は釋尊の御降誕になりました日て御座いますから私くしどもはどうか此日一日を何か聖い仕事の爲に費やしたいと思ひました處が池上で清水師が本尊論を述べらるゝといふこととて御座いましたから志を同ふする人々と共に八日の午後一時頃に品川に落合まして京濱電車で大森を経て池上へいらひたので御座いました私くしどもが行きつきました最早時間が来たといふので清水師の講演が釋迦堂で始まりす處でした、四月八日そらして釋迦堂うらしてまた本尊論、私くしどもは大いなる感情にうたれました(白藤)清水さん

の風彩が出山の釋迦の様であるのは床しいことではないか然し吾々は餘程慎重な態度を持たねばなりませんと思ひました何しろ本尊論を聴くのでありますから(相川)私くしは一二年清水さんを見せませんでした近頃は非常にお年をめした様です然しいつもながらの雄辨には敬服いたします先づ日宗に於ては殆んど師の右に出づるものはありません(不新)序論は此位にいたしまして師の宗學上の意見に就て私くしどもは批評を述べたいと思ひます、師は最初宗學綱領の發布式であるからといふて宗學上の問題を一二のべられました例の宗教の五綱といふことを古來いふて居りますが、また眞正の教相判釋ではない依て五重相對の判を用たさいはれましした師は五重相對の判に就て一々細かい説を公にせられました成程教相判釋のしつかりしたものは從來ないので御座いますから新たに日蓮宗の教相判釋をこしらへるのは困難で御座いますませう天台の教相判釋が佛教の判釋中尤も精密なもので御座いますことは事實で是をのけて外は餘り感心したのもありません、今や日蓮宗の宗學復興時代に際しまして日蓮上人獨特の教相判釋を主張するといふことは日宗學者の等しく苦心する處で御座いますせう覆藏教、顯露教などといふ判釋もありませんか亦三種の教相といふ分類もあります此等は一寸苦心した教相判釋です今清水師が主張せられます五重判も敢てあしき判釋とも覺へませんが要するに教相判釋の主意は精密を

尊びますこと、思ひますから若五重判の解釋にして一代經の資格を詳細にのべる事が出来たらうれに満足するも敢て不可とは覺へません(白藤)五重判の教相判釋は精密でしかも從淺至深の網格でありますから精密な丈うだけ嚴格に出来て居ります初の大相對から本迹相對までは簡單でありましたが要領を得た説明を聴きました肝心の第五番目の種脱相對を聞きたく思ひましたに清水さんは時間が移るからとて説明なさいませんか尤も宗乘講義録に詳しく書てあるそふてすが私はまだ見せんから實は彼處で聞きたかつたのでするれから檀林の學風は自由研究だといふことで御座います私が私は自由研究とゆふことか好きで御座います何に致せ此てなくては眞の眞理は發揮いたしません兎ても昔流の變な教權は全く眞理を撲殺します旃檀林の自由研究には私は大に同情を寄せます確に日宗學海の一異彩であります私は曾て京都の中檀林の學風を一見した事がありました其時實に驚きました其教權の嚴重なおどろきました否々寧ろ其濫用にねどろきましたあれではチツトも生徒の思想を暢ばすことは出来ません何か清水さんに願ひまするとは少し異流と云れる位の迫害を受けても自由研究の學風又は大に主張してもらいたいのであります(不新)自由研究といふことを清水師が主張せらるゝにもかゝはらず時として恐ろしい教權をふりまはされるのは私くしの少し不審に思ひます處で御座います然しな

から唯聲ばかりでも自由研究といふことか此種の學校にありませんのは日宗教學の發展上甚だ喜ばしいこと、思ひます(相川)何しろ清水さんの宗學綱領は五重判と三秘といふことが骨子の様に思はれましたが成程内容を一々に話さないですれば話はい切れましたが成程内容を一々に話さないですればそれは長時間を費やすこととせう(白藤)こゝで話を本尊論に入りました本尊論に就ては田中智學居士と清水師との間にこれまで何か意見をたゝかはせられませんでしたかあるとかで日宗新報の記者は兩師に對して本尊論の意見を早く述べて結論をつけよと迫られましたこともあつたさうですか清水師は敢て其か爲にいふのではないと前以て断はられました亦本尊論に就て決定を與るといひふらした人もあつたらうてすがそれも断じて間違で自分は今日は一家の意見として本尊に就て意見を述るのであるといはれました(不新)流石は自由研究だといはれますはさきありまして前提に念を入れて能く謙遜な言葉を繰々として述べられましたのは師が如何に研究といふことを重んぜられるといふことが判ります(相川)さうかといふて師が學者としての權威を失はないのは一つは清水師の人格によるのでありませう(不新)本尊論に就ての話を最初は佐渡始顯の本尊が正當な本尊であるか亦弘安三年にお書になつた本尊が正當であるかといふ二つの説があるといふことから説き出されました佐渡始顯正當

論は田中智學居士が主張せられます説亦弘安正當論は小林日童師等が主張せられます説であるうてすして佐渡始顯説否定論者は佐渡始顯の方には逆化地方の佛が勸請してあるからいまだ宗祖の本意が顯はれんのであるといひ佐渡始顯の本尊を是認するものは本尊抄の御文を依據として居るのであります清水師は此二説に就ては斷乎たる結論を與へられませんでした本尊に就て何れが眞で何れが偽であるといふことなうは既に重要な問題でないことの本尊は一心欲見佛不自惜身命の信念に現れるのであるといはれましてお話はずつと溯つて宗祖時代の本尊はどんなであつたかといふ問題にうつりました(白藤)師は此時巧みに言葉をあやつられまして一個の疑問として宗祖時代の寺々には果して十界勸請か安置せられてあつたかどうか頗る怪しむべきとであるといはれました即ち一尊四士の本尊があつたかは知らぬかいまだ十界の木像又は紙墨の本尊か必ずあつたかどうかといふことは頗る疑問であるといはれましたして師かかやうに立論せられます結果として本尊たるものは授職灌頂血脈相承の信念受持の證據または手形として書になつたのであるといふ師の意見が益々力を得るやうになりました師は本尊は皆それ／＼授與者かあつて決して授與者のない本尊はない是がすなはち其人の信念の現れた寫象したものであるからだといはれました併し餘り本尊の主觀的方面計りを見られませんでした完全し

た説とはいへません(相川)仰せの通り師の本尊の認識は著しく觀念門的主觀的內在的になりましたこれは已心本尊論とてもいひますのでせう(不新)清水師が宗祖時代の本尊勸請上の意見は事實をうであつたかも知れませぬ一尊四士の勸請は事實あつたに相違ありません是に向つて題目を唱へたものはありましたせう十界の木像勸請はお説の通りに怪いこととて御座います宗祖は隨身佛を奉安して信念の對象とせられましたことは明白で御座いますし旁々これは疑問として研究すべき問題で御座います今日十界の木像か羅列せられてありますのは本尊觀が發達してこつていふ觀請になつたのであらふと思ひますが師は何しろ觀念門的に本尊を認識して居らるゝものですから本尊奉安のことを餘り重く見て居られません隨てそれが紙墨の本尊であらふとまたは木像の本尊であらふとさらにかまはない結論になります次第で御座います私くしは師の本尊論の主眼が本尊とは信念の投影であるといふ主觀的説明には尠からず注意を引きましたさがさりとていまだ客觀的實在の本尊の説明がない故にあきたらぬ思いをいたしました勿論信念の意識を離れた本尊は餘り重要なものもありませんがこゝに信念をよびます即ち籠の外の鳥がなくてはなりません師は此空飛ぶ鳥を見落しました本尊の主觀的説明に成功して客觀的説明に不成功でありました(白藤)うれにま

自身の刷新にまたなければならぬといはれました信念正しければ本尊が随つて正しくなるといふことを繰返されましたがこれとて唯ひ廻しが巧みだといふの外何の反響はないと思ひます本尊改革のことは餘程の大問題で御座います但しこれに信念とか思想とかいふものゝ力ていくものではありませんこれは是非とも政治的手腕か入るので御座います即ち實際手を以て行なふことで御座いますこの手を以て行なふといふことがなかつたらいくら説いても書いても泣いても笑つても駄目で御座います本尊の改革が信念の正しきにあるといふ意見は原理としては價値はありませうがそれが實際的議論としては何の價値がありません(不新)師は本尊論の結論にいたりまして久遠の一大圓佛といふことを繰返されましたがその一大圓佛が果して人格的なるやまたは萬有的なるやの點に就ては少しも意見を述べたしにありませんでした一大圓佛といふ名は極めて美しい名で御座いますこれが矢張中心ある信念をうむことが出来ませんこれを理的に成立させるか事的に成立させるか勿論事理不二の當体であるけれども信念門的意識作用の上に把住するにはこの一大圓佛といふ抽象的のものではいかぬ私くしは今一息きりこんで此間の消息を鮮明にしてほしいと思ひます(相川)然し師が眞言の三密にかたどつた日蓮宗の三秘であるから戒壇に入らなければ本尊が成立せぬとの議論を承りました師の本尊観は三秘式から來り此三秘式は

眞言の三密式をかたどつたといはれますから其本尊観が主觀的に流れ行者自身の投影となつた次第でありますこれは絶待的主觀教でありますまいか私しは日蓮上人の宗教をむしろ絶待的客觀教だと思ひます師は先に形式はさらいだといはれましたが宗教の信仰を強くするには形式の完備が必要で御座います(不新)何しろ師の本尊論は從來のくだらない本尊の屬性の争を蹴つてうして本尊が行者信念の投影であるといはれましたが、がたしかに骨子でありました併し此意見が本尊といふものゝ意義を完全に論明したものなるや否やは別問題であります唯私くしどもは清水師の説明が本尊の客体的説明に入らずして客体的中心の一大圓佛なるものゝ人格非人格の斷定をせずまた本尊の救主的本能を説かずして主觀的の一方面に偏したを遺憾と致します次第で御座います終りに臨んでいふべきことは此日久しく逢なかつた小泉要智君に逢ひました清水師の紹介で加藤文雅君と山川智應君とはじめてお逢ひ申したことで御座います



巧花正五

日什聖人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘 阪本 日桓 講演
増田 聖道 速記

其 八

凡寶塔者妙法所在之宮殿諸佛恒居之心城薩埵來集之住所五輪本分之全鉢也此五句卅三字は分て三つ初の一句四字は標の文で有ます二に妙法より去ての三句廿一字は上の寶塔の功德を釋したる文で有ます三に五輪の下的一句八字は上の寶塔の功德を結釋したる文で有ます又た細かなる分文は隨文消釋の時に聽せませう先づ此の五句卅三字の文の大意を辨じて夫より隨文消釋致しませう先文の大意は上の法施修行を列ねたる文の中に奉圖繪一寶塔大曼荼羅一幅とある此の寶塔の功德を御説になつた文で有ます其所で大曼荼羅といふ文の上に寶塔の二字を加へてある所以は此の大曼荼羅は靈山の虚空會の七寶塔の内に於て顯したる大曼荼羅なれば寶塔大曼荼羅と御書になつたので有ます且又此の文の次ぎ下の文には法華經一部廿八品の内述門の見寶塔品より本門の如來神力品までの十一品の御經を擧て御書になつた所以は釋尊が虚空會の寶塔の内に於ては此の十一品のみ御説遊ばして餘の十七品の御經は靈山で御説きになりたる故に我開祖大聖人が此の十一品を擧て御講談遊ばしたので有ます其處

て此の寶塔を講義しまするに事に約して講ずると理に約して講ずると二種の講義が有ます天台大師の法華文句(八卷)妙樂大師の文句記(八卷末)此の本末の二書には四悉檀の中の世界と爲人と對治と此の三悉檀は事の寶塔に約して釋し第一義悉檀は理の寶塔に約して有ます將又日蓮上人の諷誦章の註釋には第一の句と第三の句を事の寶塔に約して釋し第二の句と第四の句を理の寶塔に約して釋し又た更に四句ともに理の寶塔に約して釋して有ます學生達彼の書を繕て御覽なされ諸老比丘の考には此の五句卅三字の文は吾開祖大聖人は宗祖大聖人の觀心本尊抄の文に依憑して御書になつたので有ます隨文消釋の時句々に本尊抄の文を擧て示しませう設令本尊抄の文に依憑せずして御書になつたにせよ事に約して講すべき筈で有ます如何となれば本宗所依の一念三千の觀心は能觀の一念を利那の事の一念にして所觀の境も無始の事の十界三千の諸法を觀するのて有る其他始覺本覺を論じ本住法自證法を論ずるを始め一切の法門は皆事に約して談するは宗祖已來の常談で有ます去迎理を度外視して除て談しないでは有ませぬ其所で法華經述門にては理本事迹と申して理が本鉢で事が迹用と談じます釋尊が實相の妙理の本鉢を證得したる功力によつて壽命長遠の迹用を得たるで有ると天台大師は申されました又法華經本門にては事鉢理徳と申して無始の十界三千の諸法依正色心一切の事鉢の中に無始より三諦の妙理が前後の差

て有ます薩摩と申すは菩薩の事で有ます具に云へば菩提薩摩と申すは菩提と申すは梵語で此方では佛道と申すは薩摩と申すは梵語で此の方にては成衆生と申すは菩薩なる御方は諸の佛道を用て済度し一切衆生をして佛身を成就せしむるが故に佛道成衆生と申すので有ます又た一説を擧て辨しますれば菩提と申すは自行の智慧を以て上菩提を求め薩摩と申すは化他の慈悲を以て下一切衆生を教化するを菩提薩摩と申すので有ます初の説は四字ともに化他に約して釋したので有ます次の説は上の二字は自行に約し下の二字は化他に約して釋したので有ます本尊抄云く釋尊の脇土上行等の四大菩薩文今此の諷誦章の薩摩と申すは本尊抄の脇土上行等の四菩薩の文に依憑して御書に成つたので有ます然れば則此の寶塔は開述顯本の法華經本門常住一鉢の三寶の所居たる本時の娑婆即事の寂光の本國土なる事を説きたる文で有ます寶塔と云ふも宮殿と云ふも心城と云ふも住所と云ふも名異躰同にて皆事の寂光の異名で有ます眼前日本にも支那にも天竺にも萬國ともに異名が有ます獨り所居の國土ばかりでなく能居の人にも數々の異名が有ます學生達の悉知の通り佛に十號の異名があり帝釋には千の異名があり都ての物には皆異名が有ます理には異名はあるまいと思へば實相の法界じやの如來藏じやのと數々の異名が經論に勝て算難き程有ますまして事に異名の有るは怪むに足りませぬ五輪本分之全躰也文此の

一句八字は上の事の寶塔を結成して釋したる文で有ます五輪と申すは地輪水輪火輪風輪空輪是れを五輪と申す此の五輪が事の寶塔の國土世間を組立たる用材で有ます獨り所居の國土世間のみ此の五輪の用材にて組立造作したる者では有せん能居の衆生世間も此の五輪の用材にて組立て出來たる者で有ます我等が四支五躰は地輪で有ます血涙や唾や水等は水輪で有ます身躰の烟氣は火輪で有ます出入の息は風輪で有ます身躰の内に透間の有るは空輪で有ます依て衆生世間も國土世間も皆五輪の用材にて組立て出來たる者で有ます其處で本分之全躰也と有ます此の寶塔の國土世間は天竺の平等王の時や支那の天皇氏の代や日本の國常立の尊の世に始めて出來たる者では有せん無始より本來有來りたる分齊の五輪の用材にて組立て一輪も闕たる品もなく常住不變の本國土の全躰也躰で有ると仰せられたる文で有ます本尊抄に云く本時の娑婆世界は離三災一出四劫常住の淨土今此の諷誦章の結文は此の祖判に依憑して御書に成つたので有ます然れば則此の五句卅三字は本尊抄の文に依憑して事の寶塔を御説きになつた文で有ます理に約して講ずる必要は更に有ませぬ伏して以れば經卷相承の正導師たる吾開祖大聖人豈宗祖大聖人の金言に背て理の寶塔理の寂光の功德を御説なざる、理由は毫も有ませぬ學生達深く熟考をなさい

寂日房御書

本多日生師説教
木村義明筆受

左の二編は四月一日の夜、妙國寺婦人會に於ける説教なり
私は此御書を拜讀致しまして、大体四種の事柄を感じました、夫は第一に我等は宿善甚だ厚き者なる事。第二に日蓮と名乗らるゝことの解釋、第三に廉耻の心を持つべき事。第四に釋迦佛及法華經は妻の如く親の如きものなる事。此四ヶ條は此御書に於ける大体の綱目であります、今晚は此四項に就て少しく御話を爲て見やうと思ひます。

第一我等は宿善甚だ厚きものなる事
「是まで御をどづれかたじけなく候、夫人身をうくる事はまれなり、己にまれなる人身をうけたり、又あひがたきは佛法、是も又あへり、同じ佛法の中にも法華經の題目にあいたてまつる結句題目の行者となれり、まことに過去十萬億の諸佛供養の者也」

世間の學者は此世界全体を、有機物、無機物の二つに分て説明します、無機物とは水、砂石、土壤、礦物等て是は細胞的の組織でなく、又た生命と云ふものは無くて死物として取扱ふのであります。夫から有機物とは植物及動物であります即ち動物は人間を始めとして海中の魚貝及び草木の葉末に止

る昆蟲類に至まで、皆な動物の中間であります。植物は即ち草木であります。此動物及植物は皆其身体は細胞組織に成て居て、食物の供給に固て皆な生命を持って居る、故に生物とも云ひます、御承知の通り動物は勿論、昆蟲草木に至るまで皆な死だり生れたり、或は病氣にも成れば又た生長もする、畢竟此等は生命を有する生物であるからであります、佛教で云ふ處の一切衆生は即ち此生物であります。

此生物即ち一切衆生の中で草木は扱置て此動物が最も論すべき問題であります、同動物と申しましたも身躰及精神の上にて、其境遇及位置の上にて甚しき懸隔を持って居る、即ち幸福果報に就ては大變な相違があるてはありませぬか、世間の學者に謂せますると此んな事は天地自然の配合で、何でもない様は謂ひますが、佛教の方で申しますると此に大問題があるのて則ち宿善説は此から起るのであります。一般動物の中に於きましても、昆蟲類は境遇及び位置の最も劣等なるもので、即ち宿善の最も薄きものであります、人間は境遇及び位置の最も優等なるもので、宿善の最も勝れて居るものであります。

宿善とは前世の因であります、過去即ち前の生にて善なる行爲事業を爲て置けば、夫が原因と爲て此世へ生れて來て幸福優勝の果報を受け、又た前の生にて惡の行爲事業を爲し置けば、夫が原因と成て今世に不幸不自由な果報を受けるので

あります。即ち昆蟲類の如き前の生にて餘程惡い事を仕てあるのに違ひないのであります。彼のミ、ズナ等は前の生に酒屋であつて、酒の中へ水を混合して賣たので五百度の間、手も足も頭も尻も目も鼻も無い者と生變りて、地の中土の底に住て罪滅しを仕なければならぬのだらうであります。人の幸福を嫉みねたんだり、矢鱈に怒り喧嘩を仕たり、強慾を張たり下らない屁理屈をこねたりするものは大底畜生に生て來るのであります。人間に生て來る者は中品の十善を持ちたる者にて、口と心と身とに於て少しも惡い事をせず、普通善事のみを仕て居たものであります。其中にも十善の天子と申しまして人間の中でも帝王の身分に生れて來る者は前の世にて非常な善い行を澤山仕た果報であります。斯様に原因から調べて見ますると人間に生て來るのには容易な事ではありません。餘程澤山善い事を仕て一生の間少しも過失の無ひ位に仕なければ人間に生變ては來られません。此から今日の社會を考へ見まするとは今の世の人々が死んだら皆な昆蟲類の様な者に生れ變てありませぬ、恐らくは再度人間に生て來るものはありませぬ、淨土宗の言草ではありませぬけれども千中無一でありませぬ、實に人間に生て來るのは六敷いのであります。涅槃經に

「地獄へ墮るもの畜生に生るものは十方世界の土の如く多きが、人間に生るものは爪の上の土程に實に少く、仰せに成

たのは誠に所以あるとてあります、然るに我々が斯して人間に生て來たのは全く過ぎし世の善根に因るのであります。又同じ人間の中にも最も尊き佛法に遇い奉るとは、是れ又難いので最も果報の多いものであります。して見ますると日本人は大底佛敎信者でありますから、日本へ生て來る人は前の生に餘程大善根を積た者計だと思ひます、又同じ佛敎信者の中にも法華經の題目に遇ひ奉り法華經の信者となり題目の行者と成たものは、夫こそ一通や二通の善根功德では無かつたてでありませう、既に過去十萬億の佛様を供養したる功德に依て法華經の題目に遇い奉りて結句は其信者行者と成たのだと佛様も仰つたてはありませぬか、又法華經には斯様に説てあります。前の生に於て種々の功德の根本を積たる者は法華經の信者となりて、特に諸佛の護念を受く」と。何と皆様始め私供は有難い身の上ではありませぬか、法華經の信者は世間の人々よりも他の佛敎の信者よりも、一倍も二倍も喜で好いと思ひます、何故かと云へば此等の人々は地獄へ墮ちたり或は畜生に生變る時がありませぬけれども、我々法華經の信者は何の様な事があつても、決して地獄へ墮ちたり畜生に成ることはありませぬ、否寧ろ靈山往詣が決して居るのであります。夫を思ふと實に我々は幸福な身分で優勝な境遇地位ではありませぬか。此優勝な境遇立派な果報から我々の前世を推して見ますると餘程の善根功德が積てあつた様に思われます

十萬億の佛を供養したと云ふのも事實でありませぬ。是等の善根功德が宿世に積み重ねてあつたからして、今生に於て成佛決定の地位に到たのであります。實に吾々の信仰を獲ましたのは宿善の力でありまして、決して凡智の所作ではありませぬ、この信仰を捨つる如きことあらば、自己の大果報を抛つ次第で愚の至りてあります

「日蓮は日本第一の法華經の行者なり、中尋 不思議の日蓮をうみ出させし父母は日本國の一切衆生の中には大果報の人也、父母となり其子となるも必宿習也」

誠に日蓮上人の父母なる重忠と梅菊は實に果報者の中の果報者であります、世界第一の幸福者であります、日蓮上人の弟子信徒たる六老僧九老僧等を始め、富木殿、波木井殿、四條金吾等の人々は御經文の如く、宿植徳本の人であります、

●第二 日蓮と云ふ名前の解釋

「一切の物にわたりて名は大切なる也、さてころ天台大師五重玄義の初に名玄義を釋し給へり、日蓮と名のる事自解佛乘とも云ひつべし、かやうに申せば利口げに聞たれども道理のさすところさもやあらん、經云く「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間世間に行して能く衆生の闇を滅す」と、此文の心よく、案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は、上行菩薩末法の始の五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明を指出して、無明煩惱の闇を

てらすべしと云ふ事也。」

此御文章は宗祖自ら日蓮と名乗りたる所以を御解釋なされたのであります、凡そ世の中に何が苦いと申して眞闇黒程恐しくて苦しいものはないさうであります。故に監獄なぞで極くシブトイ罪人に成ると密室監禁とか申して、針の穴程の隙間もない眞闇黒な室へ入れて置くのださうです、さうすると如何な強情な罪人でも實際堪へられなく成て、直に白狀するさうであります。試みに皆様此世界へ太陽が出ないと思像して御覽なさい、何にも見へなく動くことも出來ないのは勿論、如何に恐しくさうして如何に苦いてありませうか、殆ど想像の出來ない位であらうと思ひます、夜に成て月はなく星の光りもない物の白黒もわからぬ眞の闇夜に成て御覽なさい一歩も外へ出られないてはありませぬか、然るに有難いことには此世界には、太陽とか月とか星とか云ふものがあつて光明を送て呉れるので、凡ての生物は生命を持つことが出来るのみならず、安樂と慰籍とを與へられ發達進歩するのであります。人間の無明煩惱は闇黒で御題目は光明であります、人の心に無明煩惱が働いた結果は、其人の生涯を黒星だらけにして死だ後には、地獄と云ふ闇き世界へ行くのであります、冥途とはくらさみちと書きます、我々は折角此人間の明るき世界へ生て來ながら、又しても闇き世界へ往くのは實に嫌ではありませぬか、死んでも嫌だとは此事でありませぬ。此を可愛相

だと思召したのが佛様で、種々に御工夫の末、最も光りの度の強い所の法華經を御説きに成て、無明煩惱の闇を照し破たのであります。併し末法の衆生の無明煩惱は闇の度が一層強ひからして、更に最高極度の光明を發する様にと思召して、一部八卷六萬九千三百八十四文字の經文を、妙法蓮華經のタツタ五文字に煎じつめて上行菩薩へ御授けになり、佛の御使として末法に生れ出て最闇黒の無明煩惱を照し破らしめたのであります。故に佛様は此上行菩薩を公衆の前で、御褒めに成て仰せられるのは「日月の光明が世界の一切の闇黒を取り除くが如く、此上行菩薩は末法に出て、題目の修行を始める時は必ず能く一切衆生の煩惱の闇を滅し除くであらふ、上行よ必ず頼む努力を怠る勿れ」と仰せられた神力品の斯人行世間の文は此であります。底て日蓮上人は御考に成た、

「日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本國の一切衆生に法華經をうけたもてと勸めしは是也」
 不思議にも我は今ま生命を賭して迄も題目を廣めんと思ひつゝあるが、ヨモヤ我の前身は上行菩薩ではあるまいか、よしや我は上行菩薩にあらずとも上行菩薩の御使ひであるふ。よし又た我は上行菩薩でもなく御使でないにしても我には大確信がある、此大光明ある題目を弘めて日本國の一切衆生の煩惱の闇を照さんとする我は、恰も此世界に無限の光りを放つ處の大陽の如きものである、我は正に此無限の光を有する

日輪を以て我名とすべし。又た清廉潔白蓮の華の如きはなし夫れ蓮は淤泥より出て、染らず、清蓮に躍て妖ならず、親しむべくして狎るべからず敬すべくして忌むべからざるものは蓮華に如くはなし。特に法華經の蓮華は本因本果を具足して佛の一切の功德を聚めたるものなり、一切の佛皆蓮華の上に坐し給へる良に所以なきにあらず、我は正に妙法蓮華の蓮を以て我名とすべし。一切の功德を聚めて而かも清廉潔白なること妙法蓮華の蓮の如く、無限の大慈悲光明を有して夫を發射し照すこと日の如き我は、正に日蓮と名乗るべし。斯く思ふて我は自ら日蓮と名けたり、人之を聞かば如何にも我は高慢らしく聞ゆべけれども、道理の指示する所尤もてはありまいか。

斯様に宗祖自ら御名前を御解釋に成たのであります、後世の人が如何様に日蓮の二字を解釋するとも、兎ても斯美味は解釋出来ません、實に日蓮上人は大慈大悲の大導師であります。我々の無明煩惱は此光明に依て照され、我々が死する時は無間地獄の途は塞がれ靈山寂光の大道は明かに開かれるのであります。此も前の生の善根の果報ではありますまいか御經文には何と説きましたか、「我が滅度の後に於て、應に此經を受持つべし、是人佛道に於て決定して疑ひあること無けん」と我々は此佛陀の印可を與へられたる信仰であります是程安心な事はありません。(つゞく)

懺悔録

野茨花生

はしがき

初め此の稿を起すや、余は單に懺悔録として、余が最近の感興を書くべく、罪に腦める青年の訴願に代らんと思ひしなりき。半ば事實を交へ、半ば架空の想像を加へて、哲學、外道の見地を散文詩的に叙述せんと企てしなりき。虎を書いて猫に類するか、うれとは變りて吾は筆をつゝいて蛇を出しぬ、單に煩悶をのみ書かんとせしものが、救済の側にまで立ち入り、遂に那邊に神の啓事の現はれ、如何に之を攝受すべきやとの一大難問に遭遇したり。

吾はこの問題とこの文体とを比照し更に自己の學才に想到してうここに多大の困難を豫想すと雖も尚筆を捨つるに忍びず、即ち猪勇を振つて、題を懺悔録と改め、初筆を懺悔に起して、終文を惠光に結ばんと欲す、元より組織整然たる論文に非ず、唯々吾が胸中に浮ぶ儘を筆に云はせて其の間僅に一脈の系統を見出さんと欲するものなり。もし幸にして吾が懷抱の一部を述べ得ば吾が願足れり
 終に、一言すべきは、此の稿を起すべく、余に多大の刺戟と幾多の神韻とを與へられし恩人あり、余を導ひて、苦悶の暗黒より出し、將に失はれんとしたる青年有爲の生靈を蘇生せしめ、之に慈悲光明の希望の岸を指し示し給ひし事

なり余はこの人を心私に胡蝶の母と呼ぶ今此の稿を初むるに當り謹んで此の恩人に感謝の意を表し、諸佛諸天の冥護によりて、余が恩人の菩提を祈り、更に此の功德を以て普く一切に及して、法界萬靈平等利益を祈る。

一、懺悔の巻

櫻匂ひ、雲雀囀る陽春三月の樂今將た闌なれども、思ある身には春も春ならず、櫻も櫻に非ずして、萬腔の鬱悶堪へ難く、夕、風の靜なるを憤り、朝日の麗かなるを怪む。何すれんば、百難又何を辞するに足らん哉。侮蔑も、嘲笑も、貧苦も、欠乏も、吾を激せしむる所以に非ず、吾は怒濤澎湃として、怒り、狂ひ、激し、叫んで、地を噛み、岸を碎かんと寄せ來る所、泰然自若、何を潜上者がと計り、微笑みて立つ巨巖のそれにも況して、外界の森羅萬象、爪を磨き、牙をならして、怒氣凄まじく、一度にぞつと寄せ來んども、動せず、狂はず、たとへ天下悉く背かんとも、例へ佛天凡て捨てんとも、吾は吾が信ずる所に従つて、信ずる如く行ふ。何の願慮をも、何の悔恨をも持たず、吾は實に敵を恐れざる事、昔ダビデのそれにもまして、自ら天下第一の勇者なりと誇稱するなり、されど、あゝされど、敵は追手に非ずして、搦手にありき、吾を破り吾を苦しむるものは、旗鼓堂々、正々の陣を

張りて、眞正面より切つてかゝる天下百萬の敵にもあらず。暗夜私に鼻息を窺ふ陰忍姦邪の佞人にも非ずして、獅虫のろれのごと、自ら作り、自ら養ひたる、旗下股肱の臣にありしなり、嗚呼、吾は我が理想と、吾が懺悔とによりて、狂ひ、叫び、泣き、悶ふべく、花笑ひ、鳥歌ふ春三月の天に捨てられしなりき。鬱憂あれども語るべき人なく、理想あれども解する人なし、止なん哉、止なん哉。吾は人の世の穢れと、人の心の低きとにあき果てたり。あきて、あされて胸中抑へ難き憂悶を藏す、那邊にか發せん、那邊にか發せん。鬱憂の巻となる。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。吾は友に走りぬ。悔ひよ、悔ひて更に贖の清き事業をなせと。吾は母に走りぬ。改めよ、類なき罪にしも非ず、改むれば可なりと、吾は敵に走りぬ。君よ、此の如くば既に宿年の怨晴れたり、更に、共に、々々、大に天下を咀はんと。是か、非か、吾犯したる罪吾流したる毒も吾は満身凡て罪に穢れたり。河に潮を得ず、石に油を望み難きが如く、心の凡てを毒と穢とに咀はれたる吾には、消き、美き事業は望み難きなり。吾がなさん事業も毒に汚れずんば、偽に満てるなり。人には清からん事も、汚れし吾には魔の業と化するなり。嗚呼、毒盡りたり。吾は死なん、吾は死なん。我求めしは、生の道喜の道に非ずして、死の道、苦の道なりき。友も母もはた敵も之

を興へず、我は如何にすべき。たどひ天下百萬の耳目は欺き得んとも、たとへ慈悲惠光の御手には接し得んとも、いかにしてか、いかにしてか、心の聲を抑ふべき。汝は此の如き罪と穢れとに満てるものなり。偽りて今清浄を装ひ、慈悲を飾ると雖も、汝を毒し、汝を誤りたる可憐の罪人は、永へに地獄に墮して、汝の流したる罪と穢れとに苦しめり。汝偽善者！と吾は死すべきなり。否、否々、死未だ我心を欺くに足らず。吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。吾は神に走りぬ、悔ひよ、さらば天国は汝のものならん、と吾は佛に走りぬ。懺悔せよ、懺悔に消ぬ罪やあると。吾は魔に走りぬ。好漢、更に、々々、毒と穢れとを以て全き人生を咀ひ盡すべしと。是か、非か。吾が犯したる罪！吾が流したる毒！近くは數人の人を誤り、廣くは天下幾萬を苦めぬ。火も、水も吾が罪を燒き、清むるに足らず、吾は内面の獄吏に苦んで、神や、佛に苛責さるべく、膝下に跪きしなりき。驚きたり！何ぞ其の誑詐の大なる。天下亦此の如き大山師あらんや。幾多の人を毒し、幾多の人を苦めたるを、唯一片改悟懺悔の情によりて贖ひ得べしとは、吾は喜ばず、吾は喜ばず。吾は阿鼻大城の火と炎とによりて、苦み腦み叫んで、吾が犯罪の根も、種も跟跡も、凡て燒き盡されて、再び穢なき人と大手を振つて濁歩せんと望みしなり、吾が希望は救に非ずして苦刑にありき。されど、悲哉。神も悪魔も、はた佛も唯救

濟安養の道をのみ説いて、未だ清戒めの法を示さず、嗚呼我は永に悶ふるか。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。佛に走るも不可、母に走るも不可。慈悲救済の手は吾に背いて置かれたり。吾は惠光に浴し、大悲に隠れて、世を欺き己を欺く能はず。花笑ひ、鳥歌ふ春の野に、唯一人雪を求むる強ね者と化し、罪と穢れとに恥ぢて、夜を晝と、横に曲りて、苦をのみ追へるなり。悪魔可なり。怨敵可なり。毒よ！濁よ！疾く來りて、吾を呑み、吾を食へ。吾は疾風岩を飛ばし、毒炎世界を燒く所、ろくに胸底より大笑せんと欲す。救は吾がものに非ず、平和は吾が意に適せざるなり。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。進んで改めんか。はた退いて更に汚れんか。改悟は吾が意に満たず、救は吾が心に適せざるなり。さらば如何にせん、よし吾は退いて、大に世を咀い、人を苦しめ、更に更に毒を呑み濁を吸ふて、満身悉く罪と化せん哉。毒を以て毒を制す。吾は罪によりて罪を忘れんと欲するなり。來れ、悪魔よ！汝は我友なり、一度踏み迷ふたる人生蹉躑の道は、脱せんとし、脱する能はず、逃れんとして、逃る、能はずして、吾は苦に堪へず、吾は苦に堪へず。佛も、神も、はた、母も吾を救ひ、吾を慰め得ずんば、來れよ、悪魔！來つて汝が毒手を借せ！吾は汝と共に、世を壞り、人を盡さんと欲す。善哉

々々、聖賢とならずんば石川五右衛門となるべし。佛を捨て、神を捨て、吾は悪魔に行き、罪に没せんと思ふ。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。吾は去つて悪魔に息はんと欲す。平和よ、安穩よ、去れ、行け！疾く吾を逃れよ。滅亡は近づけり。逃げよ！花よ、胡蝶よ。吾は昔の吾ならず。毒蛇は迫れり。逃げよ！争鬭よ、破壊よ、來れ、來れ！吾が前に來りて吾が手を握れ。友よ。風よ、炎よ。吾は昔の吾ならず、吾を逃れて那邊にか行く。友よ！

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。吾は悪魔に隠れぬ。快か？我心静けさか？酒に苦んで酒に酔は、遂に滅亡を脱する能はざるなり。罪に苦んで罪に没すとも、爰大苦痛、大懊惱を逃れん。炎に渴いて破壊を念ひ、毒に飢いて人を咀ふ。善なるもの、靜かなるもの、弱きもの、愚なるもの、凡て泣き、叫び、腦み、亡んで我が軍全勝の凱歌を揚ぐる時、そこに一片哀憐の情を絶する能はず、過去の衆罪は更に新なる加勢を得て、吾を悶わしめずんば止まざるあり。嗚呼、吾も亦吾が家に非りき。過ちたり、過ちたり。吾は僅か計りの苦に堪へずして、理性を失ひ、轉倒の迷見を抱きしなりき。恥哉。吾は死なんと思ふ。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ。萬死尙贖ふに足らず。暫く臭骸を亡して自ら慰めんと欲す。以て吾罪の一部と思ふ。

にもあらず、以て吾苦痛を醫すべしと思ふにも非ざれども、吾は生に堪へず、吾は世に伍する能はざればなり。基督教界を唱へ、佛者地獄を説く、無間地獄に墮ちて、紅蓮白蓮の猛火に、骨も、肉も、身も、皮も、焼かれ、焼かれて、又焼かれ、焼かる、疾苦堪へ難く叫喚天地に満たん時、その時、その所、この苦と、この火とによりて吾が犯したる罪の種も實も、影も、形も、凡て焼き清めらるゝを思はば、吾は快哉を禁する能はず、我は初めて安穩の地を得たり。行かん哉、行かん哉、人の恐れて逃れ、悪魔の避けて隠るゝ無間大城の炎こそ、吾には無量の希望と甚大の安慰とを與ふるなれ。吾は罪と穢とによりて既に鬼畜に墮せるもの、生くる能はず、生きて惜しからぬ吾が假の命を捨て、とく我は死によりて、惱と苦とに行かんぞと思ふ。吾は死せん。死よ、死よ！疾く來りて吾を苦痛に導け。

吾に罪あり、人を苦め、己を苦めぬ、萬死尙贖ふに足らず。吾は地獄の苦を思ふ。されど、さて、吾が欲する苦惱の地は他界此の世を距て、ありとなすか、地獄とは死によりてのみ行くべく、生きては遂に人の苦に過ぎざるか、否、否々、決して然らず。吾が犯したる罪の報は、求むるを待たず、尋ねるを要せずして、既に、々々、吾が身心に無量の苦痛と懊惱とを科せるに非ずや。之れ即ち無間の苦なり、之れ即ち地獄の苦なり、何ぞ他界死を距て、阿鼻叫喚を求むるの要あら

ん。愚なる哉。地獄にして適、苦痛にして可ならば、吾が今の境涯こそ即ち吾が求むる無間地獄の苦にして、吾は今の痛悶に快哉を叫ぶべきなり。嗚呼吾は過てり、我は過てり。初吾は今の苦と、今の惱とに堪へず、ろこに一片の惠光をも認めずして、神に走り、佛に赴きしに非ざりしか。而も又悪魔に來り、地獄に歸る。一の惠光をも見出してに非ず、矛盾も又甚しい哉。實に吾は轉倒せるなり。先に罪と穢れどを悔いて救済を叫び、清跋を望みし時吾はろこに全く罪のみの吾を認めしか。はた罪に抑へられたる良心の苦悶を覺えしか。燒きたる豆に花を望まば、人誰かその愚を笑はざらん。罪のみの吾に贖罪を叫ぶ、佛の大悲も、地獄の業火も、經も、祈も何の甲斐かあらん。吾は苦悶の内良心の火影を、悶々の内慈悲の光を見ざりしなり。狂にあらざるや。(未完)

不受不施史料 (四)

梶木日種

二、身池對論と古受

元和元年夏の頃三浦長門守爲春と云ふ紀州侯の家老が、京都に滞留の砌、奥師の不惜身命の高徳を慕ふて屢妙覺寺に参り法話を傾聴した、此人は彼の有名な養珠夫人に萬の方の弟で文武兼備の人であつたから、家康は殊に深く其の武勇を歎美

した、又法華宗の強信者であつたから、奥師は其の篤信を嘉みして法華宗誘施禁斷の條目、諸門流の法式、並に舊記等を抜書して與へられた、是れより先々慶長年中に本滿寺の日乾は身延へ轉住して居つたが、此の抜書を見て大に驚き自分が大佛の誘供を受けた身の咎を脱れんが爲めに邪會の書を作つた、此の書は曲會私情の料簡、言語道斷の惡義を書立てあつたから、奥師は禁斷誘施論を作つて之れを破折された、ろこで日乾は又日遠と共に謀して破奥記を作つた、依て奥師は宗義制法論三卷を著し、又門流清濁決疑集を書いて、延山が日乾の誘法に穢がされて後は參詣すべからざると、穢を淨むる方法等を詳論された、又養珠夫人が乾遠二人の邪義に加擔するを諫められたが、夫人は却て立腹して奥師に反抗された、今更寛永三年極月に夫人へ送られた諫書中の一節を次に抜粹しやう

向後は御文などは給り候とも御音信は曾て御無用にて候、日乾日遠御信仰候て彼の申邪義を御用ひ候は、さりとは釋尊高祖代々の御敵と成給ふと見申候故、御音信にあづかり申候へば釋尊高祖の御敵と同類と能成る様に存候へば迷惑不過之候、某し二代の國主の御命に背き他國に遠島十八年の間難行苦行をいたしなから、高祖の御敵と成給ふ御人の御音信など受申候へば、某が年月の難行苦行も湯をわかして水に入たるが如くに成候へば加様の迷惑無

之候、所詮かほきの御信力御威勢を以て日乾日遠に屹と御異見被成、二人の人々改悔をいたされ身延も昔の如く法水清く成申候は、日奥も則身延へ參詣いたし人々をも又々申候て參詣いたさせ候は、高祖大聖人もいかにうれしく思召され候はん、若々今の分にて身延の法水濁り天下の參留り候は、只だ養珠院殿御一人の御咎にて候べし云々かく京都と身延との間不和となり延山の法義亂墜したに付いて、關東池上の日樹上人は大に之れを悲しみ乾遠二人を度々諫められたが聽納れない、其の上或る年日遠が延山から年賀に江戸へ登つた歸へりに、例の如く池上に滞留し其の歸山の日に日樹が川崎驛まで見送つた折、日遠が一冊の書を日樹に渡したから奥中で之れを見ると即ち破奥記であつた、此れより先き已に再三檀家より日樹に破奥記を呈出したが其の儘秘藏して不問に措いたので、それは大佛供養は已に慶長の末年に止まり、又江戸で臨時の佛事が執行されても吾宗だけは只風經を勤めるのみで毎つも供養を免除されて最早宗制に就ては異義はなかつたからである、然るに日遠が破奥記を手渡しから後は彼等の邪見が愈々盛になつたから、止むを得ず日樹等正義の人々は彼等の非違を糾すことになつた、隨て都部の眞俗は彼等の染濁を厭ふて遂に延山に參詣する者が年々稀少になつた、日遠が延山を退いて後、日祝日要日深の三代僅かに過ぎて日遠の代に至り、乾遠等相誘ふて頻りに讒訴を構へ

たので、これが身池對論の興りである、或は寛永三年九月秀忠公大人崇源院殿の法會の折、日樹のみが施物を受けずして身延派が施物を受けたのを無間の業人と罵り身延を無間山だと斥けたから、延山より訴へるに至つたのだと云ふ説もあるが、延山謗地の事は已に崇源院法事の前より都鄙の真俗が一同に唱へ立て、居るし、又此の法會の折には池上日樹身延日深關東諸寺諸山、京都諸寺の代妙顯寺常住日鏡等が増上寺に諷經して皆一同に供施を受けなかつたので、この事實は已に對論の折にも一問題となつた程であつて、延山の日深も供養を受けなかつたとは明白である、のみならず對論の翌月即ち寛永七年三月に秀忠公の妃君家光將軍の御姉たる京極若狭守の北の方安院殿の法會に池上日樹身延日深關東の諸山が小石川傳通院に諷經した折にも、已に前月對論の結果不受の宗制彌々明白となつたから、此の時是一同に供養を免せられた、して見れば崇源院の法會の時より事が起つたといふ説は非である

さて彌々身延方が幕府へ訴狀を提出したのは寛永六年二月二十六日付であつて上訴の主旨は「池上日樹は日奥が大佛供養を受けざる邪義を救はんとして、延山に對し妄りに謗言を加へ、延山の前任日乾が大佛供養を受けたる故延山は謗法の地と成り參詣の輩は地獄に墮つべしとして、延山の參詣を抑止し供養を留停止速に延山を滅却せんとす、故に已むを得ず高聽

を驚かし奉る、彼れ日樹は國主の供養は謗法の施なる故受くべからずと唱へ乍ら國主所施の田園を受用し、又身延は謗者なりと云ひ乍ら延山信仰の緇素より施物を食る、心口相違し自家撞着の者なり、敬て裁斷を仰ぐ」と云ふのであつた、この訴訟の翌月備前岡山連昌寺より池上へ見舞狀を送つたに對して池上より發した返書の本文を次に掲げて訴訟前後の實況の一端を示さう

閏二月十九日之御飛札具令三拜讀一候、如レ仰從ニ延山一以ニ目安一被レ致ニ言上候、借舊冬廿六日從ニ賀州御袋様同廿九日迄毎日兩度づ、使札被下候て御被成候、先一味和談し於ニ御袋様に益取替計も仕候へど被仰候て、何共迷惑に存入候き、當正月八日御城へ直仕候次に參候て御禮申上候へば、座著より和睦仕候へど御被成候て宗旨終日同言にて被仰候、野僧も、能々御被成候て宗旨筋目さへ能候は、無異候由、終日同様返答申上候、延山前代も宗旨法理穢染被致候先師は改悔懺悔御座候間如ニ其作法にて候は、先一味可仕候由強々々と申上候き就其御袋被仰候は、何事も佛法之筋目不存候女人之事に候間平に、無味に和睦仕候由被仰候、左様に候は、先年日富様日瑞と於ニ京都一日奥日乾和睦之扱候つれども無味扱にて候故、又加様之六ヶ敷事出來候間手形を日還被致候は、和睦可申由申候處に、尤手形可致之由被仰候間

左様に案文を此方より可進之由申す

案文

宗旨法理如ニ先規不受不施之義堅守而不可レ存ニ新義一爲ニ永代一札如レ此候

年月日 日 暹

と案文を書進候處に、彼黨「新義」之二字を除之様に被ニ相好一候、一字も除之事不罷成一候由強申候き、依之賀州御袋様御扱事切候、其後法華宗之御侍且那衆重て御拵被成候半と被仰候間、先度賀州御拵之時御女儀之事に候間、少柔に案文を好申候き、歴々之御侍中之拵にて候間彌々永代堅剛皆々様之龜鏡にも罷成候間一爲ニ改悔一爲ニ後代一札如レ此に候」と被書給候は、一味和合可申候由申候故、彼方彌々無念に彼念候哉言上被致候、是は紀伊御袋女性にて候故出頭衆を頼入候は、御所存頼可罷成と被ニ存入一候故にて候へども、江戸中御城方町方取沙汰「此方は先規之宗旨の法理、彼方は新義邪義」と一同に風聞仕候故、此方に勝手に罷成候、はや、正月より久々の事に候故彼方弱被申候、此方は于今毎日造營普請計にて候、況延山目安被上より此方へは于今御裏判も不被下候故返答書も不仕候、安閑無事にて候、乍去往々往々ては御尋も可有之かと存候、此四五日は無二油斷一談合申事に候、殊更彼方には色々怪

異計打續候に、此方には一事も無何事候、僻見邪義之現罰就來候へども無慚愧之人にて候間其驗も不存事淺間布不便之至にて候、猶近々有ニ其隠一問敷候、恐々謹言

三月廿三日 池上 日樹 在判

備前岡山 連昌 寺費報

かく身延より訴出たが漸く翌年に至つて彌々對論と成つたの時池上よりの答書は「不受不施の法理は祖師已來殆ど三百有餘年に及んで一宗の諸門徒更に異義なかりき、然るに身延先住日乾誤て新義を立て他宗の供養を受くるを許し、恣に宗旨の法理を破し衆人をして謗法の業因を結ばしめ未來の苦果を招かしむ、依て或は人の便りに寄せ或は對談して諫むれども敢て許諾せず、重ねて抄を作て上代の明匠を毀蔑し剩へ上聞に達す宗門の歎き之れに過ぎず、日奥は千僧供養の時堅く祖制を守りて貴命に應せざりしかば遠讀せられたるも後赦免を蒙りて舊寺に召還され已に當御代には折紙を下され爾來數度御供養ありしも當宗には供養を免さる、文證現證不受不施の法理顯然たり、其の上延山の先師は不受の所立なるに末學として新義を企つ其の罪科恐るべし、日還は國主賜ふ所の田園を供養なりと云ふも是れ世法と佛法と仁恩と供養と歸依と不歸依とを混亂せる謬なり」とて其の區別を辯じた

のであつた、此の對論は家光公の代寛永七年二月二十一日
(今明治三十八年より二) 江戸城酒井雅樂頭の館に於て午の刻より
始まつた、列座の面々は

判者	家天海大僧正南光坊 家本光國師 南無寺傳長老 家巖海春日岡 常陸國佐野 家辨海月山寺 常陸國水戸 家什與三途臺 上總國長南 家俊海寂光院 不動院 常陸國	身延方	身延前住日乾 身延前住日遠 上總藻原日東 豆州玉澤日遠 鷄冠井心了院
奉行	酒井雅樂頭 土井大炊助 島田正忠 外數多列座 水道春法印 永喜法印	池上方	武州池上日樹 中隱居日賢 下平賀日弘 小西能化日領 前住小西能化日領 中村能化日充

對論は未の刻の終に了つて奉行衆より「今日は是非決斷の
沙汰は之れなく、重ねて御披露に及び御意を請ふべし、先づ
双方罷立たるべし」と依て池上方先づ御座敷を起し廣間に控
へたる所へ、良ありて永喜法印使者として「双方對論の口上
具に聞召し入らる、猶此の上三問三答の記録を呈示せらるべ
し」と言渡した、此の時の對論は受と不受とのと、寺領と供
養との同異を論じたので、當宗が不受の立義なるとは元より
明かであるが、寺領と供養との同異に付て池上方では、日向
記の不染世間法の下「國王大臣より所領を給はり官位を玉ふ

其夫には染せられず、謗法供養を不_レ受_レ以て不染世間法と云
也」の文を引て國主賜ふ所の田園は世法で即ち仁恩であるか
ら供養とは異なる論じたが、身延方は正眞の本には「謗法
供養不_レ受_レ以」の語は無い不染の染は染著の義だと曲解して
居る、已に對論の時版行の本を持參して出たと云ふから之れ
は邪義を募らんとて新に開版して古紙に摸寫したものかと思
はれる、此の時の對論の記録は身延方のと池上方(現に不受不
施講門派に日樹自筆の)のと二様ある、又江城年録にもあるが身
延最負のもので世の歴史家が已に信を措き難いと云ふて居る
要するに身延方は此の對論に負けたのである、かくて身延よ
り即日付て池上へ問難書を發した、池上よりは同月二十三日
付て其の返答書を出し同時に身延誤の條箇十二ヶ條の問狀を
提出した、所が月を越えてもりの返答が出ないから翌月池上
より左の訴狀を提出した

一今度の儀者於二宗中一祖師之立義被二相破一候間相論申事仁
候 會 奉 對 對 御 公 儀 非 違 背 申 候 然 處 從 二 身 延 一 宗 旨 之 立
義 被 二 申 曲 一 候 間 尤 迷 惑 奉 存 候 乍 恐 以 二 雙 方 記
言 上 去 二 十 一 日 遂 二 對 決 一 其 上 雙 方 以 二 記 錄 一 可 致 二
三 問 三 答 之 旨 被 二 仰 付 一 候 條 依 之 一 問 一 答 互 相 渡 候 於
中 從 二 此 方 一 數 多 問 難 申 懸 候 處 身 延 衆 重 而 不 被 二 致 二 返 答 候
自 古 任 二 問 答 之 作 法 一 記 錄 之 返 答 無 之 候 得 者 負 仁 任 候 間 其
旨 急 度 被 二 仰 付 一 可 被 二 下 候

錄一被_レ遂_レ御糾明一可_レ被_レ下_レ候

一 大佛供養之後度々御供養雖有之於二日蓮宗一者被_レ成_レ御宥
免一候其上權現御所様以二御下知一不受不施之御折紙被_レ下
置一候上者彌宗旨之作法如二先規一永代無二相違一様偏奉
仰二上意一候以二此旨一宜預二御披露一候 誠惶頓首

池上本門寺 日 樹 在 判

寛永第七庚三月二十一日
進上御奉行所

ろこて本來は身延方が非理であるから御答を蒙るべき筈で
あるのに養珠夫人が身に替へて身延方を救ふたからして、遂
にその翌月次の如く裁決されたが追に幕府も池上方を問答に
負けたと誣ゆる譯にも行かぬから公命違背の名の下に處斷し
た所は注目すべき點である

池上日樹違目之事

一 池上日樹今度申立候不受不施之儀者先年 權現様邪義と
聞召日與を遠島流罪に被_レ仰付候 然處に唯今其御宰違背
申亦不受不施之儀申出候事不届被_レ思召付而日樹者信濃
國伊奈に被_レ被_レ御預二徒黨之出家衆者御追放之事

一 板倉伊賀守折紙有之由此折紙之文言之儀曾以不被_レ成_レ御
覺一候事繼 伊賀守一札有之其權現様被_レ成_レ御宰一候處
を頼し申立候儀曲事に被_レ思召一候其上二札之年號月日相
違之處不審に被_レ思召一候事

一日與儀者伊賀守御託言申上候に付而以二御慈悲御前に被_レ
召出_レ候處に今度張本人而權現様御宰之旨致二違背一不
受不施之義日樹に爲二申立一書物以下相渡候 再犯之處別而
曲事に被_レ思召一候日與如二最前一袈裟衣を剝取對馬に流罪に
被_レ仰付一候事

寛永第七年卯月二日

當日池上方六人は酒井雅樂頭の館に召寄せられ、永喜法印が
右の違目を讀上げ、次に代々の折紙並に數通の文を取上げて
土井大炊助曰く「日樹、此の折紙等に加判を致さるべし、何
時なりとも所用の節は之れを歸すべし、先々預り置く」云々
と、かくして不受の證文を沒収したのである、そこで日樹は
比州伊奈へ預けられ、日賢は遠州横須賀、日弘は伊豆、日領
は奥州相馬、日進は信州上田、日充は奥州岩城に追放と定ま
り四月五日に江戸を退去するととなつた、又妙覺寺の奥師は
再犯として此の時處刑さるべきであつたが、裁決の前月即ち
三月の十日に已に遷化されたから其の儀不問に措かれた、然
るに奥師の門業と自稱して居る不受不施派に於て明治十年四
月に刊行した龍華新報第九號に掲げてある奥師略傳を見ると
奥師が此の年三月十日に遷化されたるに同月下旬(裁決は四月
日相)に至り重ねて没後の刊に處せられ對馬へ流されたとし
てあるが之れは頗る奇觀である、若し果して此の説が事實で
あるならば奥師は念佛宗の法然の跡を繼いだ邪師と謂はねば

ならぬ、處が實際は没後の刑に處せられたのではなく、墓所も儼然京都妙覺寺に存仕し幕府でも死屍に鞭つが如きとはしなかつたのである、全体此の對論は前に述べた通り池上方が理分であつたから、單に首領株のみを處分して他は一切御咎はなく、却て後に至つて不受一派に對して家光公より更に政道仁恩の御朱印を下された程であつた

さて身延方は首尾よく池上方を追放したから、對論に勝つたと詐つて記録を偽作し、又門中へ回文を發した、其文は就今般所論之ヲ義一種種雜說風聞之由候、然者我山之法理於國主之御供養者常恒受之候、間不レ及ニ對論候、但平人之施者ニ於中古ニ爲息世譏嫌ニ我等再今更不レ改之候、則兩隱居與ニ愚意一同心候池上日樹並、得黨者誤不レ可受國主之御供養ニ由付而此度令違ニ對決ニ文理共閉口候故被仰ニ付曲事ニ候以ニ此旨能々可有ニ弘通ニ候

寛永第七年四月十五日

身延山末寺中

日 暹 在列

又日遠も池上比企谷兩山の院坊同宿小僧並に末寺の住持院坊同宿新發意等に命令して連判の起請文を書かした、其文は就今般所論之ヲ復一日樹之所立爲ニ邪義ニ之段曾以不レ存候而信仰之處此度仰之趣、尤、領掌仕候、然者總而從ニ國主賜ニ沙門一地子地領等者三寶御崇敬之故仁候間、悉皆爲ニ御布施供養ニ事決然仁候、此旨經釋祖師妙判分明也向後右之

これをつまんで申せばかうて御座います佛滅後一世紀の頃に上座部と大衆部との間に佛陀論の争ひが起りまして盛んなこととでありました生身の釋迦佛をとつて此が眞の佛であるといひましたのが上座部で此は保守黨で御座います大衆部の方では今の現身の釋迦は假性にして法身の佛陀がいますと論じたこれは進歩派である

▲上座部は毘曇宗俱舍宗となり三十四心斷結成道の釋尊を立て、以て歴史上の佛陀を渴仰しつゝあつた

▲大衆部の系統を引いたものは彼龍樹の唱へ出した三論宗で即ち進歩思想の系統を引いたもので佛陀の身量無邊をとき威力無邊をとき佛陀の絶對的傾向をとき二身論を主張したのである二身とは法身と生身との二身である

▲俱舍成實三論法相は印度の佛敎で前の二宗は小乗で後の二宗は大乗であるけれども其佛陀觀は少しの發展はあつたけれども目に立つ程でもなかつた

▲支那佛敎に於きましては三論宗の系統をひいて居る天台宗は如何であるか天台は法報應の不即不離の關係を述べて生身と法身との調和を計り亦釋尊の解釋、上本述説をどれり久遠と今日の佛陀の性格を論じた是天台の特色である

▲華嚴の佛陀觀は如何であるか華嚴の佛陀は宇宙神的佛陀なり萬有的の佛陀である大方廣佛といふ名は宇宙全體を佛陀化したのである華嚴はかくて十身十佛を立てた

越隨分弘通敎化可仕候若此旨於違犯一者蒙三寶諸天祖師大菩薩之御罰可レ墮ニ在惡趣一者也

寛永八年 未 卯月二十二日

諸 僧 在列

於三日遠尊師法座下一御近習中御披露
前掲の日樹の訴狀、幕府の違目、此の回文起請文等を併せて見たならば、當時の情勢が自から會得出来るであらう、かくて身延方は受不施主義を興立し、之れに賛同した諸山諸寺は受不施流となつた、茲に於て始めて不受不施派と受不施派との兩派に分裂したのである、此の時はまだ不受不施派の方が優勢であつたから、身延は引續き反抗し四代將軍の代に至つて復び邪謀を選んだ爲めに寛文の不受不施法難が起り、不受派中より悲田宗と云ふ邪徒が出来た、これは表面不受と見せて内實受不施であつたので、身延一派に對してこれを新受不施署して新受と名づけ、身延一派を指して古受と稱したのである、次には寛文の出來事を述べやう

村上專精氏の佛陀論に就て

本多日生師談 訪問記者

▲村上專精氏は佛敎統一論の第三篇として佛陀論を公けにせられたこれに就て聊かお話をしてみやうと思ひます

▲村上氏は原始佛敎の佛陀觀から説になりましたがさつと然し澤山に分れてはいるが三身論に少しも異なる華嚴は餘り萬有敎化して居る

▲眞言宗は大日と釋迦とに就て本迹本末を立てた眞言の大日は人格的にあらず萬有的のものにあらず色心二法の當位が即ち大日如来であるといふのである

▲眞言に於て釋大同体論と亦釋大異殊論とがある

▲淨土敎の方ではどうか久遠實成の彌陀を立て、釋迦大日を彌陀の分身とした

▲村上氏は壽量品の惠光照無量壽命無數劫といふ御文はとりも直さず久遠の彌陀の説明であるといはれましたこの説の價値のないことは今更いふまでもありません

▲次に日蓮上人の方に就ては釋迦大日彌陀とありますが其中彌陀及び大日の本佛論を蹴つて能く釋迦本佛論を主張したのは大に可なることであると論せられました

▲氏の大鉢の意見はさつとこんなものであります天台の釋迦中心論が天台特殊の見地であるかの様にいはれましたのは甚だ研究が浅いといはねばなりません

▲日蓮上人の開目抄にかういふ御文がありますそれをこゝに述べますれば
俱舍成實の二宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり天尊の太子迷惑して我身は民の子も思ふか如し華嚴宗眞言宗三論宗法相宗等の四宗は大乗の宗なり法相三論は勝應身に似たる

佛を本尊とす大王の太子我父は侍と思ふが如し華嚴宗眞言宗は盧舍那大日等を本尊とさだむ天子たる父を下して種姓もなきものを法王の如くなるにつけり淨土宗は釋迦の分身のあみだ佛を有縁の佛とれもひて教主釋尊をすてたり禪宗は下賤のもの一分徳あつて父母をさぐるか如し佛をさげ經を下す此皆本尊に迷へり例せば三皇已前父母を知らず人皆禽獸に同せしが如し壽量品を知らざる諸宗の學者は著生に同じ不知恩のものなり

▲この御文は至極簡單でありますけれども能く原始佛敎からの佛陀觀を批評しつ盡して餘蘊なきものと思ふ
▲今更村上さんがくどくしく述べないでも宗祖の意見か簡にして能く其短所を指摘されました深く之を味ひますとたしかに一の批評的佛陀觀史であります

▲ここに最後の斷案が宗教的にして久遠實成の釋迦正統論を鼓吹せられました點は佛陀觀上特に記憶すべきことであると思ふ
▲今日の村上氏の議論を六百年前の開目抄は既に道破して居上人の見識は眞に高いものである



南無釋迦牟尼佛

四月八日釋尊降誕會に當り報恩の爲めに

茨花生

序

南無釋迦牟尼佛降誕會に當り報恩の爲めに
わが拙き筆に限りぬの御徳を稱はま
つるを許し給へ
有難さに對する能はず
尊ぶとまに控ふるを得ずして
余は筆を取りたり。
余が文拙く
余が想乏しと雖も
貧者一燈の燈を思ひ
至誠わきには、あふれて
余は筆を取りたり。
生老病死の業苦を體み
悉達太子の聖蹟を捨て給ひつ、
苦行幾年
我等の爲に山に入り
我等の爲に河に入り給ひつる
唯にそれのみならんや
王舍城邊、菩提樹下に坐し
禪定三昧、妖魔を降しつ
教化說法
摩訶般若法華と
一代の聖敎、凡て衆生の爲なりける
唯にそれのみならんや
或る時は因縁なき
或る時は眞想を示し
又、或る時は慈悲と惠光とを賜ひて、
誕たる我等に靈を興へ
法華八卷の妙典
題目五字の眞藥
以て未來を定むべく
以て現世を安んずべし
意義なかりし我等迷凡の生活は久遠の

雜報

▲先更會の綱領及び規則 同會は左の如く宣言及び規則を發表せり

- 先更會綱領
- 一日蓮上人は力也光也 吾等は吾等の現在及び將來の爲に上人を研究す
- 一日蓮上人は力也光也 吾等は日本の現在及び將來の爲に上人を研究す
- 一日蓮上人は力也光也 吾等は世界現在及び將來の爲に上人を研究す

拜啓、今般或る新らしき方面に聖祖の教義を承介可仕、その事業の端緒として先更會を組織仕候、假規則は左記の通りなり、大体は講演筆記及概況を統一誌に掲載致し置候間御承知の事と存候願はくは佛天の加護と諸君の贊助とによりてこの聖業を貫徹せん事を祈り候啓具

東京府下品川南五丁目妙國寺
先更會假事務所ニテ

四月十五日

先更會假規則

- 一、本會は先更會と稱す
- 一、本會は日蓮上人の教義を研究し、發揚して、自己の修養と社會の改善とに資す
- 一、本會は當分講演會演說會を開催す餘他の事業は時宜に應

古定賢正
木村義明
國友文次郎

本佛を得つ、亂麻の如かりし二代五時の諸教は統一の歸趣を得たり、

嗚呼尊哉 南無釋迦牟尼佛
若し佛出てまますんば
世は闇黒なるのみかは

若し佛出てまますんば
衆生は救はれざるのみかは。

幽玄なる宇宙
精妙なる人生
整然たるが如く
秩然たるが如しと雖も

そこに一の生命なく
そこに一の力用なかるべし。

佛降誕は實に
當に加へし眼
像に入れし魂なり。

世界の無意義は除かれたり
人生の迷闇は照されたり

深く罪福の相に達し、普く十方を照し給ひつ、

大聖釋迦牟尼世尊はとわに我等の頭上に輝き給へり。

嗚呼尊哉 南無釋迦牟尼佛

余は歌はざるべからず
文の拙き何事かあらん
想の空き何事かあらん

余は歌はざるべからず
食はざるも可なり 飢ふるのみ、
寐れざるも可なり 苦しきのみ、
食はずして死し
寐れずして死す

余が恐る、所に非ずと雖も
もし佛徳を稱へずんば、
余が精靈を如何にせん
余が報恩を如何にせん

余は佛徳を歌ひ
願はくは南無釋迦牟尼佛
大悲限りなしとまき
わが無禮を許し
わが想を導き給へ

余は佛徳を稱へんと欲す
願はくは南無釋迦牟尼佛
大悲限りなしとまき
わが無禮を許し
わが想を導き給へ

余は佛徳を稱へんと欲す
願はくは南無釋迦牟尼佛
大悲限りなしとまき
わが無禮を許し
わが想を導き給へ

余は佛徳を稱へんと欲す
願はくは南無釋迦牟尼佛
大悲限りなしとまき
わが無禮を許し
わが想を導き給へ

余は佛徳を稱へんと欲す
願はくは南無釋迦牟尼佛
大悲限りなしとまき
わが無禮を許し
わが想を導き給へ

- 一、經費は會費寄附金によりて之を支辨す
- 一、會費は當分半年三十錢とす
- 一、幹事は當分發起者之に當る

發起者

古定賢正
木村義明
國友文次郎

本會に御用事の方は事務所宛の事
雜誌新聞著書の御寄送を乞ふ、
賛成者を御勸誘被下度候
地方の人にては會員たるを妨げず、追ては全國へ支部を設
けたり希望に候
●本宗教師僧侶にして軍役に服し居るもの並に戰死者左の如

- 出征第五師團第一野戰病院
看護手 朝倉俊達
- 出征第一軍近衛步兵第四聯隊第七中隊
步兵軍曹 中田量叔
- 出征後備第二師團第二野戰病院
看護卒 紀野俊耀
- 第一師管本郷聯隊區書記
砲兵曹長 柳生肇叔
- 野戰砲兵第十八聯隊補充大隊
第一中隊第一班
- 砲兵上等兵 森本憲章
- 出征第二軍後備步兵第二大隊
第七中隊第三小隊第一分隊
宇津木玄英
- 出征第一師團國民歩兵第二大隊第四中隊
第二小隊第五分隊(韓國瀾波兵站部守備隊)
岡澤乾珠

- 出征第三師團臨時國民大隊第二大隊
第一中隊第二小隊 礪光
- 出征
特務曹長 北田會真
步兵第二聯隊補充大隊第三中隊附
看護手 三谷會善
- 出征第一軍近衛步兵第四聯隊
第六中隊第一小隊
一等卒 米倉義明
- 出征第九師團歩兵第三十六聯隊第十二中隊
第一小隊第一分隊
上等兵 京藤義應
- 出征第二軍第三師團歩兵第三十四聯隊
第三中隊附
看護手 吉田堅晴
- 出征
步兵二等卒 有田宏道
- 出征中三十七年十一月廿六日
松樹山に於て戰死
北田賢濟
- 出征中二〇三高地の戰闘に於て戰死
角川泰碩
- 出征
征露交戦已來軍國の爲め宗門
は多數の出征軍人を出し亦た少からざる戰死者を出したる其
中に北田賢濟君は静岡縣庵原郡松野村北松野妙松寺現住七屋
賢生師が會つて全君の出所なる千葉縣大平村廣根圓壽寺住職
たりし當時師弟の關係を結ばれたる人にして其の出兵は宮谷
在學當時なり、去る明治三十五年十一月一度滿期除隊となり
更に昨年三月九日佐倉野戰歩兵第二聯隊第七中隊に編入の命

に接し全月廿一日佐倉兵營を發して廣島に向ひ全廿四日全市
に著し越て四月廿一日宇品乗船五月九日清國盛京省孫家咀子
上陸全月十六日格條溝附近の戰闘に全廿六日南山の激戰に參
加し前後戰ふ事數回第參軍に從ひ十一月廿六日旅順要塞地點
松樹山攻撃に名譽の戰死を遂げ而も此の陸軍歩兵伍長昇任を
受けしとを證して「賢濟院護國日勇大德」と云ふ本月二日神
奈川縣濱濱市中村町千五十四番地全人の父なる北田豐吉氏は
其の葬儀を執行し遺骨を全市北方町某墓所に埋葬したり
▲千葉縣二教區通信 明治三十八年一月六日より二月三日迄
寒三十日皇軍戰捷祈願の爲め連夜各地修行の際四百九十一名
より喜拾せられたる金額參拾八圓廿錢五厘を陸軍恤兵部へ山
本日悟鈴木純智齋藤立靜加藤會圓佐野泰晋の連名を以て献納
したる由

像告

來號以下記載せらるべき重なる記事左の如し

- 一本尊論 本多日生
- 一日蓮上人の宗義及系統 本多日生
- 一寂日房御書 本多日生
- 一懺悔錄 野茨花生
- 一豫言の日蓮 野茨花生
- 一實際感化の上より見たる宗教野茨花生
- 一教團歴史の上より現れたる日什門流の精華 野茨花生
- 一不受不施史料 梶木日種
- 一詩人日蓮論 古定不新
- 一佛書文學論 古定不新

- 一日蓮上人の大日如來觀 古定不新
- 一我此土安穩 木村義明
- 一三界無安 木村義明
- 一南無釋迦牟尼佛 木村義明
- 一南無釋迦牟尼佛 野茨花生
- 一南無釋迦牟尼佛 古定賢正
- 一高橋五郎氏の日蓮論に就て 同人
- 一卷川文學士の日蓮上人傳に就て 同人
- 一小倉道敏氏の日蓮論批判に就て 同人

日蓮上人の教義一班中正誤

- | | |
|-------------------|---------------|
| 百十六 一二上 六さる せる | 八(神道)(神の道) |
| 百十七 三上 一七瀬 瀬 | 八(實證)(實證) |
| 百十八 六下 五たれ なれ | 一一には にて |
| 二下 五して しく | 八下 一たる たり |
| 一四敢 巳 | 九上 一四向つ 向て |
| 三下 一二とず らず | 一〇上 一三録 録外 |
| 一三疎曉は 疎曉 | 一六類 類 |
| 五上 一三氣 爲 | 二二可云 可信云 |
| 下 三〇て そ | 百十九 二下 一〇ちい ぬ |
| 六上 二(今)の下 二(今)を脱す | 三上 一〇瓜 瓜 |
| | 四上 七中等 等中 |

三上博士序 小倉道敏著

皇格の體現 京樂院巨經

慶長元和の大濁世を叱咤し、徳川大將軍と當時の俗如米とを
して顔色なからしめたりし徳川大將軍の讀の偉人は是をこ
れ誰とかなす、常樂院日經實にその人なり、徳川の變政は此
の大偉人を怨憎し、常樂院日經實にその人なり、徳川の變政は此
の一部に名を止むるのみにして、著者は惜み東奔西走殆ど三年の
大苦心を経て今や幸にその溼漑を闡明するを得たる即本書な
り、骨と血とを有せるの士は早く本書を繰て身讀達体の大
福音に接せよ、

全一冊
定價金卅錢
郵税金六錢

小倉道敏著 近世の活文字

日蓮論抄論

高桂五郎撰「日蓮論」を著し大に日蓮宗祖を非難して時俗を
迷はす、今此の「日蓮論」を非義論評して痛快極りなきもの即
ち本書なり、著者無名の天才を以て熱罵冷嘲而かも筆力雄健
にして飄逸、飄逸にして洒脱、奇想天外より來つて恰も天馬
空を翔るか如く、趣味津津々興味滾々、一日度本書をば讀み終
らざれば巻を捲ふべからず、殊に卷中「日蓮論著者の動機」一
「過去に於ける日蓮論」日蓮主義事實の發現」等に至りては議
論卓絶笑へべく感ずべく想は卓卓を打て快と叫はしむ

全一冊
定價金廿錢
郵税金四錢

發兌 京都市上京區平樂寺村上勘兵衛
東京三條北
東京自活布教隊・須原屋
賣捌 東京自活布教隊・須原屋
東京三條北
東京自活布教隊・須原屋

征露大捷紀念分影 高祖日蓮大聖銅像

第一回二千五百體豫約募集
東京美術學校教授竹内久一先生原型
尙本件につき詳細の事を知りんとする向は「往復はつき」にて御申込あらは
「聖容弘傳」と申す書一冊無代進呈すべし
明治卅八年四月
東京淺草區永住町百七番地

取次所 東京淺草區南松山町 高祖御尊容分影會事務所

拙衲義今回任地本隆寺へ赴任入寺仕候間書信
等は凡て轉任地へ御發信相成度候也此段廣告
仕候也
明治卅八年四月 千葉縣山城郡片貝村本隆寺住職 小川日豊

拙衲等今回左の通り夫々轉任を命せられ赴任
入寺致候間此の段知諸君に謹告仕候也
明治三十八年四月

- 東京市淺草區永住町妙經寺副住職 里見圓海
- 全市全區吉野町安盛寺住職 藤崎通明
- 全市今區新谷町善仙院住職 川崎泰秀
- 千葉縣長生郡長棚村滿藏寺住職 大川日教

統一

第百二十二號要目

- 日蓮上人の宗義及系統(承前)……本多日生
- △高橋五郎氏著日蓮論に於て……辭
- 日什大正師置文諷誦章(承前)……阪本日桓
- △南無釋迦牟尼佛……
- 寂日房御書(つゞき)……本多日生
- △新らしき龍女……むらさき
- 懺悔錄(承前)……野茨花生
- △管長撰擧外數件……
- 不受不施史料(其五)……梶木日種
- 各地教信……
- 余は如何にして信仰に入りしや……一 太

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可毎月一回十五日)
(明治廿八年五月十五日發行統一第百廿二號)

(明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可毎月一回十五日)
(明治廿八年四月十五日發行統一第百廿一號)

御

籙

附

ぞ

く

小
道具

人

形

武

者

東

羽

人

子

形

板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

基礎金領收報告

一金參圓也 東京府品川本榮寺住職 吉田 日宣殿
 一金壹圓也(第六回) 東京市牛込區原町久成寺住職 田井日晃殿
 一壹圓也 東京市淺草區象潟町 廣崎金十郎殿
 一金壹圓也 岡山市旭町 高木 トク殿
 右御寄贈相成正に領収仕候茲に謹て謝意を表し候也
 明治三十八年四月 南松山町 統一團

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
- 一諸讀申込の節は住所姓名を隱書にて認めらるべし
- 一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
- 一本圖は別に領收書を發せす但し領收證を要する向は返信料を封入する。或は爲替振込の節拂渡濟通知料紙錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五號活字廿七字時每一行金八錢なり

明治卅八年四月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
 編輯人 山根顯道
 印刷所 鈴木暉學
 北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行行 統一團